

## 小場の廃寺 常秀寺

常陸大宮市域には、かつて多くの寺院がありました。江戸時代前期の寛文年間（1661～1673）の時点で、常陸大宮市域には少なくとも200を超える寺院が存在したことがわかっています。しかし、徳川光圀や徳川齊昭が実施した寺社改革や、明治初期の廃仏毀釈によって、寺院の多くがその姿を失いました。現在は、地名やわずかな史料、伝承からその痕跡を伺うことができますが、その実態については不明なことが多いです。今回は、その中から、小場地区にかつて存在した常秀寺について紹介していきます。

## ◇常秀寺の歴史

長故山常秀寺は、小場字船渡に所在した曹洞宗の寺院です。天文9年（1540）に小場義忠が父小場義実の菩提寺として創建したと伝えられています。この年、部垂城を舞台とした佐竹氏の内乱（部垂の乱）で義実が自害しており、本寺はその直後に建立されたと考えられます。江戸時代には鱗勝院（那珂市額田）の末寺として存続しましたが、幕末～明治初期の頃に廃寺となりました。正徳5年（1715）、大館城（現秋田県大館市）へ移った小場氏の家臣が旧領である常陸国を訪問しており、その際に常秀寺へ立ち寄ったことが「常陸御用日記」に記録されています。



▲常秀寺跡地（小場地区）

## ◇小場義実の遷墓を巡る係争

部垂の乱に敗れた小場義実の遺骸は、部垂義元と共に部垂城内に埋葬されました。それから約200年が経過した延享2年（1745）、義実の遺骸と墓碑は故郷である小場村常秀寺へ改葬され、隣には遷墓碑が建立されました。しかし、改葬は一筋縄では



▲小場義実墓碑（左）と遷墓碑（右）

行かなかったようで、同寺の僧・大車と部垂村庄屋・立原氏との間で遷墓をめぐる争いが生じ、裁判にまで発展したことが古文書に記されています。当時、部垂城内の義実墓碑は荒れた状態となっていたことから、常秀寺は佐竹西家（小場氏）や水戸藩寺社奉行と協議を進め、改葬の準備を進めていました。一方、立原氏は義元旧臣として、義元や義実らの墓所が断絶しないよう維持を努めており、墓所管理の正当性が部垂村にあることを主張しました。その後、改葬が決定するまでの経過については不明ですが、改葬の概要を記した遷墓碑の存在から、この一件が常秀寺にとって重要な意味を持っていたことがうかがえます。



▲義実遷墓をめぐる記録（当館蔵）

※6月10日（土）から歴史民俗資料館で中世の常陸大宮と小場氏関連の企画展が開催されます。常秀寺の旧蔵品も展示される予定です。ぜひお越し下さい。

## 【参考文献】

・高村恵美「部垂の乱をめぐる記憶と由緒意識」（『常陸大宮市文書館報第8号』収録）

（高橋拓也）

## ■問い合わせ■

文書館 ☎52-0571